

2

王立鉱泉水病院の創設と発展

柳澤 波香

津田塾大学／青山学院大学

イングランド西部に位置するバース (Bath) は、古代ローマ時代より鉱泉療法で知られ、今日でもヨーロッパ有数の保養地となっている。18世紀前半のバースは鉱泉を目当てに英国内の富裕層が会した賑やかな社交の場であり、これらの富裕層を対象として医師らが集い、富裕層からの慈悲と鉱泉の効用をあてにした貧しい民もまた英国全土からこの街へと流入した。18世紀の英国は「病院の世紀」の異名を持ち、富裕層が疾病貧民の救済のために篤志病院を設立する動きが拡大したが、バースにおいても1738年、市長、裁判官、実業家ナッシュ、郵便事業で財を成したアレン、内科医オリヴァー (William Oliver, 1695-1764) らが中心となり、病院設立事業が始まった。ナッシュはその莫大な私財を投じ、建築家ウッドは無償で設計を担い、アレンも建築用石材を無償で提供した。国王ジョージ3世、皇太子も寄付金を下賜した。設立時の名称はバース総合病院 (Bath General Hospital) であったが、直ぐに王立鉱泉水病院 (Royal Mineral Water Hospital) と呼称されるようになった。更に人々は親しみを込めてこの病院を the Min と呼んだ。

病院は市内中心部に150床で開院し、内科医オリヴァー、外科医ピアス (Jeremiah Peirce, 1696-1765) が無償で病院医師を務め、患者の入退院の可否を判断した。同時期の英国内に創設された他の病院は地域の疾病貧民を対象としていたが、王立鉱泉水病院は困窮者であることを条件に英国全土からの患者を受け入れた。

入院患者は、主として、重度の皮膚疾患、鉛中毒による麻痺・痙攣、リウマチの患者であった。病院設立から19世紀初頭までは、重度の疥癬、乾癬患者が入院患者の10~15%を占めた。重度の皮膚疾患のためロンドンの St Bartholomew's 病院で「不治」を宣告され、退院を余儀無くされた女性が紹介となり、軽快して退院することもあった。鉛中毒が原因とみられる麻痺、痙攣、疝痛の患者は入院患者の約半数を占め、多くは作業工程中に鉛に曝露される塗装業者、ガラス製造業者であった。多数のリウマチ患者もイングランド西部から紹介された。オリヴァーの引退後に病院内科医となったファルコナ (William Falconer, 1744-1824) は1785年から診察を行ったリウマチ関連の895症例をまとめて1793年に発表した。鉛中毒患者の症例が集中したことから、ファルコナとファザギル (Anthony Fothergill, 1737-1813) は食品に含有される鉛と銅の有害性に関する論考を発表している。この他、王立鉱泉水病院には痛風や消化器疾患患者、くる病の小児患者も収容された。

病院の1760~1830年の年次報告書ではこの年代の入院患者の平均28.9%が退院時にはCured, 49.7%がMuch betterと記載されているが、バースの鉱泉水の医学的効用については18世紀後半から疑義が持たれ始めた。カレン (William Cullen, 1710-1790) とヘバデン (William Heberden, 1710-1801) は通常の温水浴と鉱泉水の外用には差がないと明言した。化学、病理学、生理学の発達した19世紀に入ると鉱泉水の効用を説くバースの医師は殆ど皆無となった。王立鉱泉水病院では温熱療法を用いるリウマチの患者の割合が増大し、イングランド西部地域の医師らの研究会も院内で定期的に開催され始めた。

20世紀初頭、理学療法としてマッサージ療法が導入され、第一次大戦による傷病兵の治療に用いられた。この頃から病院はリウマチ疾患に特化した専門病院となり、それに伴い、1935年、病院の名称は王立英国リウマチ疾患専門病院 (Royal National Hospital for Rheumatic Diseases, 以下RNHRD) に変更された。

The Minの愛称で長く親しまれてきた市中心部の病院は、2015年、王立バース連合病院 (Royal United Hospitals) との統合により閉鎖されたが、RNHRDは王立バース連合病院の一部となり、市郊外へ移転し存続している。